

〈序 説〉

ストアとスコラの倫理学

松 根 伸 治

ベルギー生まれの碩学 Gerard Verbeke による *The presence of Stoicism in medieval thought* (Washington, D. C., The Catholic University of America Press, 1983) は本文 100 頁に満たない書物ながら、多くの示唆と知識を与えてくれる¹⁾。本書の内容から、今回の研究課題を考えるきっかけになると思われる点をかいつまんで紹介しておこう。

第 1 章 *Medieval acquaintance with Stoicism* において、著者は中世の哲学者たちがストア派について知った様々な思想的源泉を整理したうえで、第 2 章以降いくつかの主題に着目することにより、中世思想の様々な場面にストア主義の影響が見出されることを論じている。具体的には、第 2 章 *The challenge of materialism* では、ストア派に由来する或る種のマテリアリズムが中世には伏在し続けていたこと、トマスはこれを人間の行為や自由を考える際に乗り越えるべき課題として受けとめ意識的に論駁しようとしたことが述べられる。第 3 章 *Ethical perspectives* は、良心・良知・自然法という密接に関連しあう三つの概念にストア的色彩が濃いとし、13 世紀にこれらが、アリストテレスに由来する実践的推論の理論と結びつけられた経緯に注目している。最後に第 4 章 *Fatalism and freedom* では、運命が単なる盲目的で非合理的な力ではないと考えるストア派の伝統が中世を通じて持続したことが主張され、トマスについては、『命題論註解』(*In Peri hermeneias*, I, 14) の議論が主として取りあげられている。

この著作に導かれて、トマスの倫理想とストア派の要素の関係という

1) 刊行後まもなく本誌に的確な書評が掲載されている。金井多津子評『中世思想研究』27号, 1985年, 172-177頁。なお、同著者による次の論考もある。G. Verbeke, "Saint Thomas et le stoicisme." in P. Wilpert (ed.), *Miscellanea Mediaevalia 1: Antike und Orient im Mittelalter*. Berlin, Walter de Gruyter, 1962, pp. 48-68.

観点から、考察する価値のありそうなテーマを列挙してみる。(1) まず、情念をめぐる問題群がある。理性と情念の関係、それぞれの情念についての考察、ストア派的禁欲主義とキリスト教的禁欲主義の比較などを論点として立てることができる。欲望や快樂の位置づけも問題になるだろう。(2) 徳の原理的考察に関して、たとえば徳の部分という考え方や、諸徳の結合に関するストア派の発想がトマスの議論に影響を与えている面があるのではないか。また、枢要徳など個別の徳を具体的に論じる際にも、トマスがストア派による概念規定を手がかりにしている場合がある²⁾。(3) 自然本性も着目すべき概念である³⁾。ストア派における「ピュシスに従う、ピュシスに反する」、あるいは「ロゴスに従う、ロゴスに反する」という表現とその内実の分析は、中世における自然法や良心に関する研究に新たな視点をもたらすと思われる。(4) また、運命・摂理・自由をめぐる哲学的思索は、ストア派とスコラ学の接点や相違をさぐるうえで興味深い。この考察の脈絡は主知主義と主意主義という問題系とも関わりを有する。(5) さらに、倫理学の位置づけ、幸福論、観想と実践の関係などの切り口が考えられる。

このように登山口は様々に提案できるとしても、実際の探求の道のりは平坦ではない。スコラ学におけるアリストテレスの影響について、かなり詳細な見取り図を描くことができるのに対して、ストア派の場合には事情がずいぶん異なる。第一に、中世のラテン語世界は、いわゆる初期ストア派の思想を直接に研究可能なまとまったテキストとして読んだわけではない。トマスはキケロを通じてストア派の概念や思想を部分的に知っているし、セネカの著作も読んでいる⁴⁾。ボエティウスを通じて、アンブロシウスやアウグスティヌスを通じて、また、ラテン語訳されたアリストテレス註釈家たちを通じて、ストア派の教説に関する情報に接近することもできた。だが、そうして得られた知識はあくまでも間接的で断片的なものにと

2) 徳については次の論文が比較的詳しく考察している。Michel Spanneut, "Influences stoïciennes sur la pensée morale de saint Thomas d'Aquin." in L. J. Elders and K. Hedwig (eds.), *The ethics of St. Thomas Aquinas*. Libreria Editrice Vaticana, 1984, pp. 50-79.

3) 中川純男「初期ストア派の倫理学における「自然本性」の概念」『ギリシャ哲学セミナー論集』IV, 2007年, 64-77頁を参照。

4) セネカの引用は『神学大全』では第2部-2だけに集中しており、*De beneficiis*, *De clementia*, *De ira*の書名があがっている。トマスがセネカの著作としている *De quatuor virtutibus* は、実際には6世紀の司教ブラガのマルティヌスのものである (Martinus de Bracara, *Formula honestae vitae*. ML 72, 21-28)。

どまっている。——第二に、中世の哲学者たちがストア派をどのように受容したかを判定することの難しさがある。Verbeke の表現を借りれば、ストア主義は「常にそこにあるが前景には現れてこない」⁵⁾からである。アリストテレスについてであれば、たとえば『ニコマコス倫理学註解』における叙述を『神学大全』などの著作と比較することによって、トマスの理解や態度の機微を私たちは詳しく観察することができる。また、思想家や教会がアリストテレスの著作の一部を危険視した歴史的経緯を分析することで（13世紀後半の禁令や断罪に関する研究などを通じて）、拒絶された側面を浮き彫りにすることも可能である。だが、ストア派の場合には、暗黙の受容と暗黙の拒絶をあぶり出さなくてはならない。——第三に、そもそも何を「ストア派」と呼ぶべきか、どのような思想的特徴をストア派に帰することができるかという点が考察すべき問題である⁶⁾。さらに、私たちがストア派として理解するものと、トマスの言うストア派に齟齬があることも予想される。

以上のような研究方法論上の困難はあるものの、スコラ学における「ストア派的要素」の受容の様子を、思想史に分け入って論じることができれば、意義深い研究になるはずである。概念の歴史を正確に辿る道筋が見出しがたいときには、思考の型、発想の型の比較というアプローチのほうがあるいは有効かもしれない。この場合、ストア派に特有と考えられる概念にまず注目することを研究の端緒とすることも可能だろう。

二年間のシンポジウムでは、残念ながら12世紀について議論することができなかった。ここではひとつだけ政治観の問題にふれておきたい。それ自体として重要であるだけでなく、今回の研究にもひとつの見通しを与えてくれると思われるからである。中世の政治思想を考える場合、この世の政治や社会は人間の墮罪に対する一種の罰であり矯正策であるという捉え方を一方に立てることができる。これをアウグスティヌスの視点と呼んでみる。他方、社会は人間の自然本性の所産であるとする“political naturalism”も、中世後期の社会観を形成する重要な側面であって、アリ

5) Verbeke, *The presence of Stoicism in medieval thought*, p. 6.

6) 前回のシンポジウムで示されたひとつの方向性は、中川純男〈序説〉「中世哲学とストア派倫理学」を参照。「断片的な言葉を通してであっても、ひとつの精神が見てとられることがある。ストア哲学の影響は断片的な主張に感じられる強い精神性にあったと思われる。そのような精神性のひとつとして、われわれは極端な理性主義とでも呼ぶべき傾向を指摘できる。」「中世思想研究」52号、2010年、114-115頁。

ストテレス『政治学』の全体が（おそらく1260年頃に）ラテン語訳されたことの意味は大きい。これに対して、C. Nederman は、大規模な翻訳以前にも様々な経路を通じてアリストテレス的な政治学上の自然主義は潜在的に受け入れられていたこと、そして、アウグスティヌスとアリストテレスの両極の間のいわば「中間の道」として、12世紀にはキケロの思想を色濃く反映する第三の政治思想の潮流が存在したことを指摘している⁷⁾。

今この議論を詳細に検討することはできないが、その枠組みをあらかじめ提題内容に関連づければ、次のように言えるだろう。スコラの倫理学のうちに、アウグスティヌスを核とする教父の人間観の伝統とも、アリストテレスの本格的な研究がもたらした成果とも区別できる局面——たとえばキケロを経由したストア派的要素——を見出すことができるのではないか。たしかに、教父の思想がすでにストア派との交流の中にあり、ストア派の思想とされるものにアリストテレスの影響が及んでいるといった錯綜した状況は、研究態度に相当の慎重さを要求する。だがそのうえで、トマスらが思想の養分をくみとった源泉の豊かさと多面性の一端を明らかにし、同時に、単なる折衷でない説得的な哲学を实らせようとする彼らの挑戦を正当に評価すること、これが私たちの課題である。

7) Cary J. Nederman, "Aristotelianism and the origins of "political science" in the twelfth century." *Journal of the History of Ideas*, vol. 52 (1991) pp. 179-194; Id., "Nature, sin and the origins of society: the Ciceronian tradition in medieval political thought." *Journal of the History of Ideas*, vol. 49 (1988) pp. 3-26. 両者とも次の論文集に再録されている。Nederman, *Medieval Aristotelianism and its limits: classical traditions in moral and political philosophy, 12th-15th centuries*. Variorum, 1997. —以下も参照。柴田平三郎『中世の春——ソールズベリーのジョンの思想世界』慶應義塾大学出版会、2002年、特に201-214頁。土橋茂樹「十三・十四世紀におけるアリストテレス『政治学』の受容」上智大学中世思想研究所編『中世の社会思想』創文社、1996年所収、173-200頁。